

## 日本の夏の風物詩といえば花火 その歴史と日本人の光への憧憬

### 1 記録よりも記憶に残ることを尊ぶ美意識

夏といえば花火大会ですね。

7 月から 8 月にかけて、夏休みになるとさまざまなところで花火大会が行われます。特に有名などころでは隅田川の花火大会や大阪の天神祭などが有名です。また新潟の長岡では四尺玉といういま日本で作られている中では最も大きな花火が打ち上げられることで有名ですね。

そのような大きな花火大会でなくても、小さな盆踊り大会や村祭りのようなところでも、花火を打ち上げたり、または海水浴などに行ったときに、海岸などで市販の花火を遊ぶ姿が見られますね。

日本の夏といえば「花火」というくらい、日本人の夏と花火は切っても切れない関係なんですね。

美しく咲いてパッと散る。日本人は、そういうことに非常に美意識を感じます。長い時間をかけて「実を結ぶ」ということを非常に尊重する文化性から、「一瞬の美しさ」に対して強い意識を感じるのです。日本人は、万葉の時代から「心の目」で物を見ることに真の価値を感じていました。それだけに「精神的な満足」というものを重視します。そのことは、現代の日本人にも強く意識されているのではないのでしょうか。万葉集の和歌も、表面で書かれている文字だけではなく、様々な意味をその言葉の中に込めて和歌を詠みます。「掛詞」などは、このような価値観から、当然に、「目に見えるものではないものに対する価値」を重視するような感じになっています。

戦後、高度経済成長を遂げ、日本も科学万能の世の中になったような錯覚を受けます。特に最近になってから「物」「金」ということが非常に大きく価値を持つようになり、伝統や文化、精神的な満足感といったような価値観が軽視されているように思えます。しかし、日本だけが、戦後敗戦の中から高度経済成長を成し遂げ、世界第二位の経済大国になれたのは、「科学」だけではなく、このような「目に見えるものではない者に対する価値」を重視する心が非常に強く作用したからではないのでしょうか。開発するということに関しても、開発するまでのプロセスや、開発することに対する意味などを重視し、一つの成果という「花」のために、多くの人々の苦勞をたたえる文化や伝統があったということが言えるのではないのでしょうか。

同じようなことがスポーツの選手でも言えますね。現在の選手を言うと様々な意見が出てしまうので、少し古い選手の話をしてしまおう。巨人の黄金期に長嶋茂雄選手と王貞治選手が居ました。記録という意味では王選手の方が常にはるかに上です。ホームランの数も、打率も、すべて王選手が勝っていました。しかし、日本人は「記録よりも記憶に残る」ということを非常に尊び、長嶋選手の方を愛するという人が少なくありません。同じチームの三番打者と四番打者で、ちょうど「陰と陽」のように、「記録の選手」「記憶の選手」というようないま対比になっているんです。そして、日本人の趣向として「記憶の選手」を好きになる傾向があるんですね。

多くの日本人の心に、「一瞬の美しさ」と「すぐに散って消えてしまう」というものに対するそのような美意識が強くあります。そして、そこに自分を重ね合わせて、その美意識で日本人を感じていたのではないのでしょうか。その本当の価値は「心の目」で記憶に残ってゆく。日本人の本当の美意識はそこにあるような気がします。

その代表格が春は「桜」で、夏が「花火」です。同じ美しく一瞬で消えてしまうもの、でも日本人の美意識には欠かせないものなのではないのでしょうか。

## 2 花火の原型である中国の爆竹

それでは、その花火にはどのような歴史があるのでしょうか。

花火の起源は中国といわれています。古くは、中国でお祝いごとになると「爆竹」を鳴らしました。これは中国での魔除けとされているのです。

漢代の『神異経』・『西荒経』という本に書いてあります。

漢の時代よりも前、都から西方の山奥に人間の姿をした一本足の怪物山魃が棲んでいました。この山魃に出会った人間は、その日の晩のうちに高熱を発し苦しみながら死んでしまったので、人々はこの怪物を非常に恐れていました。そして、この山魃は毎年春節になると、山から人里に下りてきて人々の前に姿を現し、人々を死に追いやったのです。そのために、この地方では春節は春を祝う行事ではなく、毎年死の恐怖におびえながら過ごす怖い日々となってしまったのです。

ところがある日、その町のある農民が、山で竹を伐採して家に帰ろうとした時、急に山中で北風が吹き始め、肌寒く感じたのです。農民は他に薪もなかったので、竹に火を付けて暖を取っていました。ちょうどその時に山魃が森の中から出てきました。驚いた農民は火の付いた竹を捨ててなんとか逃げ出しました。普通ならば追ってきて祟りをなす山魃は、この日は、追ってきませんでした。山魃は、火のついた竹がパチパチと音を立てていることに驚き、山に逃げてしまったのです。これで、農民は高熱を出すこともなく助かったのです。

このことから山魃の弱点を知った村の人々は、毎年春節になると、山魃を寄せ付けないように各家庭で竹を燃やし、それに恐れをなした山魃は再び人里に現れ人々を苦しめることは無くなったのです。

このような話から中国では、「爆竹」を春節に鳴らすようになったのです。そこから話が広がり、新しい一年を迎えるにあたって、新しい一年についてくる魔を取り除くという意味で、爆竹を鳴らす習慣ができました。現在でも中国では春節で多くの爆竹を鳴らしますし、身近で見たい場合は、春節の時に中華街などに行くと、たくさんの爆竹を鳴らして新年を祝う姿を見ることができます。

昔は「爆竹」も、本物の竹を燃やしていました。竹を燃やすと中の空気が膨張して「ポン」と大きな音が鳴ります。その音が大きい方がより多くの魔物が逃げて行くと信じられてきました。しかし、中国で火薬が開発されると、その火薬を使って竹の入れ物に入れて爆発させるということになります。

火薬は、はじめのうちは「兵器」として使われていました。物語で知られる三国志、その有名な軍師に諸葛亮がいます。孔明といったほうがなじみがあるかもしれませんが。この諸葛亮が、蜀漢として南方を平定するときに使ったとされたり、あるいは赤壁の戦いの時に司馬懿親子を地雷で追い詰めたなどのエピソードが語られています。しかし、実際に三国志のこの時代にそのような兵器があったというような史実はなく、「三国志演義」の作者である羅貫中の手による創作であるとされています。「三国志演義」が書かれたのは明の時代ですからそのような創作も可能だったのです。

実際のところは、6世紀くらいに、火薬の製造とその兵器化が行われていたといわれています。しかし、火薬そのものが貴重品であったことから、現在のように爆竹として、お祝いの時に無駄な消費を行うのはごくまれであり、その時代はまだ竹に火をつける形で行われていました。

しかし、火薬を使った兵器は、すでに中国で作られていたのです。

### 3 中国から伝わった火薬と花火

では、花火の原型はいったいどのようなものだったのでしょうか。

中国では、もともと火薬を使った兵器がありました。それは、ロケット花火のようなもので、相手の陣営で爆発させて火事を起こしたり、あるいは、大きな音を立てて馬などが大騒ぎするようにして、陣形を乱れさせるような兵器でした。中国の古い画の中にも、人間と同じくらいの大きさのロケット花火のようなものに火をつけている画が残されています。

このロケット花火が、日本でいうところの「鐳矢（かぶらや）」のような形で使われるようになります。日本でいう鐳矢とは、矢の先端付近の鏃<sup>やじり</sup>の根元に位置するように鏃が取り付けられた矢のことをいいます。鏃（かぶら）とは、全長で5cm前後から20cm前後まで大小様々で、円筒形、円錐形、或は紡錘形のもので、中身が剝り貫かれて中空構造になっており、空気が入ると、笛のように音が鳴るような仕組みになっています。この鐳矢を射放つと音響が生じることから、戦場における戦闘開始の合図として用いられていました。

現在の戦争とは違い、まず、お互いの武将が名乗りを上げ、そのうえ、お互いが戦争開始

とってから戦争を行うというのがどの国でも一般的でした。そのようにしなければ、うまく相手の首をとっても、誰がその功績を得たのか全く分からないということになってしまいます。そこで、戦後の論考綱領の時のために、戦争開始と終わり、そして誰と誰が戦ったのかを大声で名乗るようにしていたのです。現在の戦争のように、隠れていたり、遠くからミサイルを撃つような戦争ではありませんでしたし、それだけに、一般の農民などには、あまり影響がなかったのです。

日本でも戦争の時にそのようにして行いましたが、中国も同じです。しかし、中国の場合はそれが「鎗矢」ではなく「ロケット花火」であったということになります。これが、徐々に、空中で破裂するような「戦争開始」の合図になり、そして、それが民間でも行うようになって花火に発展したのです。

日本に、この火薬の兵器が伝わるのは鎌倉時代の後期です。

それまでも一部で火薬が伝わっていた形跡がありますが、それが一般的に使われるようなことはありませんでした。その日本の戦争を大きく変えたのが「元寇」です。

竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』にあるように「てつほう」という兵器が元寇のときに使われます。「てつほう」とは陶磁器の器の中に石と火薬を混ぜたものを投げて爆発させる、現在でいう「手榴弾」のようなものです。「蒙古襲来絵詞」など、様々な記録に書いてありますが、初めて見る火薬兵器で、初めて聞く火薬の炸裂音に、馬も人も驚き戦争にならなかったとあります。要するに、それまでは日本に、少なくとも元寇で戦った鎌倉時代の武士たちは、火薬の存在も知らなかったのです。

当然に花火も鎌倉時代のこの時までには全くなかったのです。火薬を知らなかったのですから当然ですね。では、日本の花火はどのようにして発展したのでしょうか。

#### 4 日本で初めて花火を作ったのは誰か？

日本で初めに花火のことが書かれているのは、室町時代の公家万里小路時房までのこうじの日記『建内記（建聖院内府記）』の文安2年3月21日（1445年4月28日）の条に、浄華院における法事後に境内にて「唐人」が花火と考えられる「風流事」を行ったという記事があります。これは、三代将軍足利義満によって中止された日明貿易が足利義持によって再開されたため、その貿易商が朝廷に来て花火を披露したのです。

日記『建内記（建聖院内府記）』の中では、竹で枠を作り、火で「薄・桔梗・仙翁花・水車」などの形を表現したものが書かれています。今でいう仕掛け花火や、文字の形に火が燃えるような形のものだったのでしょうか。

そのほかにも火が縄を伝って行き来するといったもの、今でいうナイアガラの滝のようなものでしょうか。それと「鼠」と称し火を付けると「走廻」るもの等が書かれています。「鼠」というのは、この時代から「ねずみ花火」だったんですね。そして手に持って火を付けると空中を「流星」のように飛ぶものが書かれています。もともと中国は火薬を使った口

ケツト花火のような兵器があったとありましたが、この時期には火薬の量を調整して、花火として民間の娯楽の道具として使っていたのです。

万里小路時房は、室町時代それも足利将軍家が最も力のあった足利義持・義教の時代に、朝廷側のトップである従一位太政大臣になった人物です。その万里小路時房は「希代之火術也」と賞賛し、褒美を与えているのです。褒美を与えるほど珍しかった、そんなところではないでしょうか。

そのまま平和な時代が続いていれば、花火も庶民にすぐに降りていたのかもしれませんが。しかし、八代将軍の足利義政の時に、応仁の乱がおきます。『建内記（建聖院内府記）』に花火のことが記載されてから、たった22年後のことです。そして、豊臣秀吉が統一するまでの期間、日本は戦国時代になります。そして戦国時代の中期以降、種子島に鉄砲が伝来します。そのために火薬は重要な兵器になります。それでも、火薬の生成が鉄砲伝来とともにできるようになってから、花火も製造していたと記録があります。しかし、花火を使ったのは主にイエズス会の宣教師などだったようです。

天正10年3月22日（1582年4月14日）にポルトガル人のイエズス会宣教師が現在の大分県臼杵市にあった聖堂で花火を使用したという記録が『イエズス会日本年報』『フロイス日本史』に書かれています。大分県の臼杵といえば、キリシタン大名で有名な大友宗麟の居城です。天正遣欧使節団などがキリスト教をよりどころにヨーロッパに渡っています。

また、伊達政宗が居城の米沢城で、天正17年7月7日（1589年8月17日）夜、「大唐人」による花火を見物したという記録が『貞山公治家記録』、『伊達天正日記』などに書かれています。伊達正宗もキリスト教には深い理解を示し、支倉常長など遣欧使節を出しています。

戦国時代に、貴重な火薬を花火として使った二人の大名が、双方ともに、遣欧使節を出しているというのも、偶然かもしれませんが、あるいは、キリスト教の宣教師と花火が何か大きな関係があったのか、あるいは火薬の精製や火薬の使い方などに何か特別なノウハウがあったのか、いずれにせよ、奇妙な一致点ではないでしょうか。

このほかにも、日本の戦国時代の花火の起源説には様々あります。

一説には、織田信長が安土城を建築する際に、魔よけとして「火薬を使った爆竹」を鳴らしたとされています。織田信長は、当然に鉄砲の先進性を非常によく理解していましたし、その分、火薬の扱いも慣れていました。何よりも、火薬を大量に保有していたので、花火などに使うこともそんなに大きな負担にはならなかったのではないのでしょうか。

一方、現在の栃木県栃木市で、皆川山城守と佐竹衆が戦のなぐさみに花火を立てたという説もあります。皆川山城守広照は、下野長沼城主で、はじめのうちは宇都宮氏に仕えていたが、処世術に優れ、その後小田原の北条家、そして、関東に進出した織田信長の武将滝川一益に仕え、その後も、豊臣秀吉、徳川家康と主君を変えながら、江戸時代に大名家として残った家です。特に滝川一益は、織田信長に鉄砲を教えたというような説もあるので、そこから皆川氏に火薬が多く回ってもおかしくはありません。

いずれにせよ、純国産の花火の起源は、戦国時代のどこかであることは確かですが、あまりはっきりとしたことはわかってはいないのです。

## 5 江戸時代の花火とその花火を楽しみにした町人文化

江戸時代になると、戦争がなくなります。そのために、火薬を貯蔵しておく必要がなくなってきました。そして、その火薬を使った花火製造業者が多く出てくるようになったのです。

しかし、そのようにして様々なところに火薬が出回るのを恐れたのは、幕府です。そのために隅田川以外での花火の禁止の触れを出したのです。逆に言えば、そのようなお触れを出さなければならないほど、庶民の間にまで火薬が出回ってしまい、また、その事故などによって火事も多発したといわれます。隅田川でしか花火ができないとなれば、火薬の出回るところも、当然に、幕府の役人がそれを見ることができず、事故が起きても、隅田川の水ですぐに火事を鎮火させることができます。

しかし、そのようなお触れを出してもなかなかうまくゆきません。庶民の力が徐々に強くなってきて、隠れて花火で遊ぶようになります。寺島良安が書いた江戸時代の図入り百科事典である『和漢三才図会』には、「ねずみ花火」や「狼煙花火」等、子供が手に持って遊ぶ現代の市販の花火のような花火が多く書かれています。

そして、様々な庶民文化の中にも、花火が見られるようになります。

「花火せよ淀の御茶屋の夕月夜」と、大阪の夏の夜の風物詩を俳句に詠んだのは、与謝蕪村です。与謝蕪村は、摂津国毛馬村、今の大阪市都島区の生まれで、江戸時代の俳諧の中興の祖といわれるほどの俳人です。与謝蕪村の俳句は、絵画的でその情景が浮かぶような俳句が多くあります。その手法は、後世明治時代の正岡子規に非常に強く影響したといわれていますね。この句も、淀川沿い、ちょうど蕪村が生まれた都島のお茶屋で花火をしていて、淀川に移るその花火と月が、水面に揺れている光景が目には浮かぶようですね。

一方、少しユニークでウィットにとんだ句を詠んだのが小林一茶です。「世につれて花火の玉も大きいぞ」というような句を詠んでいます。小林一茶は、正岡子規の評をそのままここに書きますと、「俳句の実質に於ける一茶の特色は、主として滑稽、諷刺、慈愛の三点にあり」とあります。まさに、「滑稽」「風刺」というところが、一茶の特徴です。世のなかで活気に溢れているときは、花火の玉も景気に連動して大きな花火が打ちあがるが、景気が悪くなると花火の玉も小さくなり、全体がしぼんでさみしくなってしまう。蕪村の句のように絵に浮かぶようなものではありませんが、不景気な日本または景気が良くなった現代人においても、なんとなく理解できる、そして、少し微笑みながら頷けるような俳句ではないでしょうか。

蕪村の句を「天明調」というように言うのに対して、このような「滑稽」「風刺」の効いた一茶のような句を「化政調」といいます。

花火は、ほかの物のように奈良や平安の昔からあるわけではないので、室町文化以降の文化に大きく影響を与えていますが、しかし、美しいものとしても、また風刺して滑稽なものとしても、花火を愛でる日本人の心は変わらないのかもしれませんが。

## 6 花火の「はかなさ」と西方浄土の思想

花火は美しくそしてはかないものとして、桜に似たような風流として日本人の中に記憶されています。詠み人知らずですが「おもしろうてやがて寂しき花火かな」という句があります。もともとは花火を詠んだものではなく、鶉飼を詠んだものようですが、しかし、それを愛したものであったとしても、花火の性格と、そして日本人の花火を見る目をよく表している句であると思います。

では、花火を見て日本人は何を考えるのでしょうか。

古来「西方浄土」という言葉があります。なぜ「西」なのでしょう。

仏教が伝わった時代、日本は貴族の世の中でした。月を愛でて、その月の形から暦を作っていたのです。当然に、月が出る前の夕方は、まだ活動している時間帯です。

夕方に太陽が西に傾きますと、水の上に光の道ができます。海などに太陽が沈むときは、太陽が水平線にかかったところがあり、その太陽から光の道が水の上に引かれて、そして、その道を通して、亡くなった方の霊が浄土に行くと考えられていたのです。浄土というのは、平泉の金色堂を見てもわかるように、光にあふれたところで、闇の無い世界と考えられていました。当然に、浄土に続く道も光の道になります。貴族は朝は遅く夜は宴会をしていましたから、朝日の道ではなく、どうしても「夕日の道」を見てしまいます。また、仏教が伝わった元である「天竺」も、西の方角にあります。

ですから闇の中に光があると、そこには必ず神がいると考えられていました。亡くなった方が「星になった」というのも、日本ではそのような起源があるのかもしれませんが。

ところが、花火ができるようになって、その光を人が作り出せるようになったのです。もちろん、人が作った光ですから、その中には、神の世界につながるものはないのかもしれませんが。しかし、江戸時代、まだ電気がない時代に、光を空に作り出す。でも、すぐにまた闇の世界に戻ってしまう。そのような感覚が花火を見ている人の中にあるのではないのでしょうか。

花火大会が、お盆の時期に多く、また、供養のために花火を上げるというようなイベントが多いのも、このような思想が今も日本人の中にあるからではないのでしょうか。ちょうど、「お盆の迎え火・送り火」というような感覚と同じになって、浄土に送り届ける、または供養を行うという意味で花火を見ている人が少なくないのではないのでしょうか。

だから花火は、「美しく」そして「面白く」でも「はかない」、そして「少し悲しい」という感覚で、日本人の魂に強く訴え、記憶に残るのではないのでしょうか。

花火は、中国が発祥で、なおかつ火薬を使う世界各国に伝わっています。しかし、そのよ

うに文化やその宗教観にマッチした日本において、最も発展し進んだ技術ができるようになります。そして、今では世界各国に日本人の魂のこもった花火を輸出し、日本の文化を送っているのです。

そして、はかなく、すぐ消えてしまう花火で、日本は長く記憶に残る文化を持っているということを、世界各国に理解してもらえるようになるのではないのでしょうか。